

土田杏村の自由大学理念構築をめぐる問題 —ポール夫妻 (Eden & Cedar Paul) の労働者教育観との共通点から考える—

岡本 洋之 (兵庫大学)

1. 本研究の目的

「十分に人間性を発揮した,完全に自由な,同胞的共同社会生活」という理想実現の担い手をプロレタリアートに託した哲学者・土田杏村(1891-1934)は,来たるべき文化をプロレットカルトと呼び,自由大学運動(1921-30)によりこれの実現と制度化を図った。その際に土田は,英国で労働者文化の創造を叫んでいたポール夫妻(Eden Paul, 1865-1944 & Cedar Paul, ?-1972, 以下「夫妻」と略す)の Proletcult を,参照しつつ批判した。夫妻のプロレットカルト論が,革命実現のため労働者に社会主義思想を宣伝する内容にすぎなかったのに対し,土田は宗教,文芸,哲学等の一般的教養を含めた「もつと深いところから人間性の睡夢を喚び醒す」プロレットカルトを唱えた。本研究は,土田が有していた夫妻との共通点が,英国労働者の独学文化(autodidact culture)に気づく機会を彼から奪ったとの仮説を示すことを目的とする。

2. 労働者への教養教育を批判していたポール夫妻と,土田の思想の共通点

夫妻は,社会主義革命の実現に直接役立つ内容はすべて排斥することこそが,あるべき労働者教育だと断言した。夫妻は指弾の矛先をシェークスピアやギリシャ芸術等の一般教養に向け,英国でそれを労働者に提供していた代表的組織の労働者教育協会(WEA)を攻撃した。同時に夫妻は労働者たちを「真に階級意識を身につけ,労働者階級としての考え方ができるようになり,自分たち自身の文化に到達するまでは,自力で社会主義革命の手段を学ぼうとはしない」とも評した。労働者は自発的に学ぶ力を有せず,彼らには特定理論に基づく指導下でのみ学ばせよという,夫妻のこのやや大衆蔑視的思想は,土田と共通する。彼は民衆に対しては思いやりある態度を示したが,ついに下層民とは対等関係を築けず,人から能力を引き出す営みの対象も自分の子息に留まり,民衆のインテリ層が集う自由大学においてさえ,講義を一方向的に聴かせるだけの実践に疑問を呈しなかった。

3. 土田が WEA から直接に学ばなかったことがもたらした損失

実は土田は WEA に関し相当の情報を得ていたのに,WEA から直接学ばなかった。その理由は彼が,経済学系講座を縮小した WEA を,模範にすべきでない労働者懐柔機関とみたからであろう。この不作為は,受講者による自由な古典解釈,自由な議論,自由な論述という WEA の特長(独学の文化)を見る機会を彼から奪い,それが自由大学運動衰退の一因になったと思われる。

文献 土田杏村(1924)『教育の革命時代』,中文館書店。／土田隆(1966/12)「杏村の思ひ出」,『土田杏村とその時代』5,所収。／松塚俊三(2019/8/26)『イギリス労働者はなにをどのように学んだか,独学の文化』,本学会第28回大会講演会・公開シンポジウム資料。／山口和宏(2004)『土田杏村の近代』,ペリカン社。／Paul, Eden & Cedar (1921). Proletcult. London: Leonard Parsons.